

# Covid-19禍における葬送儀礼

71907230 総合政策学部2年 前田陽汰

## 背景：

Covid-19の影響で大勢が集まる機会が大幅に減っている。年中行事も影響をうけ、長年続いてきた祭りが中止になるなどのニュースを頻繁に目にする。その中で、葬儀はどのように扱われているかという問いを持った。そして、葬儀社・葬送関連事業者への聞き取りとオンライン葬儀「葬想式」の開発をおこなった。

## Covid-19禍の葬送：

東京23区内で26社の葬儀社に話しを聞いた。全ての葬儀社がコロナ対策を行い、参列者数を制限するなどの措置をとっていたものの、喪家の方から「このような情勢だから家族葬で」といった話しがでることも多くなったという。

昨今、家族葬・直葬といった小規模で簡素に執り行う葬儀が特に首都圏で主流になりつつある。その背景として、経済成長と共に都市への人口集中が強まり、地縁の繋がりが薄れたことが挙げられる。一方、葬儀費用を抑えたい、参列者への接待が面倒といったニーズから、家族葬・直葬が選ばれることも多い。家族葬・直葬の賛否の議論では見栄を気にして華やかな一般葬を希望すること方もいるが、そういった方にとって、「今回はコロナの感染対策のため家族葬で執り行います」というのはある種の免罪符として機能した側面もあると考えられる。

## 葬想式について：

上記のような葬送に対する意識が見えるなかで、テクノロジーが大きな役割を担う。家族葬・直葬といった小規模な葬儀が増える一方で、友人の葬儀に参列できない、最期のお別れをきちんとできない、という点で別れの機会不足といえる現象が起こっている。そこで、故人の思い出の写真やエピソードを共有し合えるアルバム兼掲示板になるサービス「葬想式」をリリースした。あくまで遺族である喪主が開式するため、大切な人を亡くしてすぐ、落ち着いた時に知らないサービスに登録して、知人に「葬想式を開式したのでよければスマホで参列してください」というのはハードルが高いと思えたが、実際に利用され、18歳の男性の葬想式では総勢116名がスマホ上で参列することもあった。

葬想式は思い出の共有に特化したシステムで、故人の友人が持っていないながらも遺族が持っていない写真が遺族に届くという機能もあり、グリーフケア的な役割も期待できる。

## 今後について：

今後、葬儀社経由で必要としている人にお届けできるよう、製品の改善をしつつマーケティング面にも力をいれていきたい。



イメージ



葬想式QRコード